

# 団塊世代の主観年齢規定要因に関する一考察

高岡 要子<sup>(1)</sup>

城 仁士<sup>(2)</sup> (joh@kobe-u.ac.jp)

〔<sup>(1)</sup> 京都市役所・<sup>(2)</sup> 神戸大学〕

Exploring the determinants of subjective age of dankai-generation people

Yoko Takaoka<sup>(1)</sup>, and Hitoshi Joh<sup>(2)</sup>

<sup>(1)</sup> Kyoto City Government Office, Japan

<sup>(2)</sup> Graduate School of Human Development and Environment, Kobe University, Japan

## Abstract

This interview surveys on “Subjective age” of dankai-generation were done to improve the quality of their welfare services, and the subjective age formation in an individual living environment was considered. The transition patterns of the subjective age were graphed case by case, and classified into seven types in total. From talking about their life history, the subjective age formation resulted from “change in the living environment” such as significant change in their life events and relationships. Through all interview results, “Temporal Landmark” theory by Shum (1998) was used to specify the regulated factors which caused “Self-youth” phenomenon that the subjective age was younger than the calendar age, and to examine how these factors influenced the subjective age formation. In addition, a self-youth mechanism was derived that the dankai-generation was youthful and energetic forever as if a lot of experiences of latter middle-aged people were activated as a landmark, and as if self-youth by landmark formation of the dankai-generation was caught affirmatively. Such a youthful dankai-generation was viewed as “Active senior” with discussion about a self youth mechanism, and a desirable transition model of subjective age to have time by youthful feelings as much as possible was presented at the end.

## Key words

subjective age, dankai-generation, self-youth, temporal landmark, active senior

## 1. 問題と目的

2007年、1947年前後生まれの団塊世代の大量の労働者たちが、定年退職を迎え、企業活動に大きなダメージを与えた。この世代は最も人口の多い世代であり、平均寿命の延伸傾向と合わせると、彼らは高齢者として過ごす時間が現在の高齢者よりも長く、「大量で長期化した高齢者」になると予想されている。その一方で、少子化によって彼らを支える生産年齢人口は減少するため、「大量で長期化した高齢者」を支える社会的負担が非常に大きな問題となる。

団塊世代は急激に変化成長する日本経済を支えた中心世代であり、また、戦後の民主的な新しい近代家族といわれる家族を形成した中心世代でもある（落合、1997）。彼らはどのような高齢者となっていくのだろうか。縁側で日向ぼっこをする腰の曲がったご隠居、といった従来のイメージ通り的高齢者になるとは考えにくい。

現在でも、高齢化に伴い、高齢者が多様化していると言われている。しかし、世間の高齢者に対するイメージは固定化しており、高齢者や加齢に対する知識や実態が十分に把握されているとは言い難い。そのために、高齢者福祉の現場においても、高齢者のニーズと供給されるサービスと

の間にズレが生じるなど、サービスの質についての問題が起こっている（鳥羽、2005）。団塊世代は現在よりも、ますます多様化した高齢者となるであろうし、高齢者福祉サービスの需要増加も必至である。よって、時代に即した、高齢者に関する「正確な知識」がより一層求められることになる。

そこで本研究では、「主観年齢」に焦点を当て、高齢者に関する「正確な知識」を得るための一手法を考える。例えば、「70歳だから～だろう」という世間の認識が、実際の「70歳」の現状に即さない場合、当の「70歳」本人が「70歳だから～」という意識を持って生活していないことが推察される。世間一般では暦年齢を基準として、他人の外見や行動を評価するが、評価されている本人は、自分の主観的な「年齢意識」に基づいて行為を選択しているに過ぎない。暦年齢とは別のもので、個人が自分自身に対して抱いている、この主観的な「年齢意識」が「主観年齢（subjective age, self-perceived age）」（Hendrics 1987, Barak & Stern 1986, Cutler 1982, Montepare & Lachman 1989）であり、自己の年齢イメージとして機能する心理的な年齢である。つまり、「70歳」本人がどのような「主観年齢」のもとに生活しているのか、ということを知ることができれば、高齢者に対するより「正確な知識」を得ることができるといえる。

本研究では、「大量で長期化した高齢者」となる、団塊世代の高齢期における福祉サービスの質を良くするため

に、団塊世代の「主観年齢」について考察することを目的とする。現在の高齢者サービスについて考えることももちろん必要であるが、「大量で長期化した高齢者」となる団塊世代の高齢期は、上述のように、より深刻な問題を抱えたと推測される。

「主観年齢」に関する研究には不十分な点が多くあり、日本においては、まだその歴史も浅いが、高齢者の生活機能に関する指標として評価されており、今後の高齢者福祉をより良くする効果的なアプローチであると考えられる。

## 2. 方法

予備調査(2007年2月～3月)の結果などを参考に、現在の主観年齢、主観年齢の変遷、主観年齢の変化があった時の生活などについてインタビュー調査を行った。

### 2.1 調査期間、場所

平成19年7月～10月

神戸市六甲地域福祉事務所、NPO法人つどいの家

### 2.2 対象者

55歳～65歳の男女15名(男性6名、女性9名、平均年齢61.3歳)

### 2.3 主観年齢の測定

「主観年齢」の調査方法は統一されておらず、調査結果を見ても、経済的地位、学歴、性差といった基本的属性と「主観年齢」との関連性において、様々な食い違いが見られる。

佐藤ら(1997)は、8～92歳の一般住民1,842名を対象に、3種類の感覚年齢(実感年齢、外見年齢、希望年齢)、およびそれらとは異なる次元にあると考えられる理想年齢の計4種類の「主観年齢」について数値による回答を求めた。次に「主観年齢」を規定する要因を検討するため、暦年齢、性別、教育年数の基本属性変数、健康度、病気の有無、経済状態、および6種類の心理尺度を対象者に実施している。

その他の先行研究においても、「主観年齢」の測定方法は様々であり、また、横断的な量的調査ばかりが目立つ。確かに、そのような調査の結果には妥当性や信頼性はあるが、個々の調査対象者の実態が見えにくいという欠点がある。本研究の目的は、これから老いていく団塊世代について「正確な知識」を得ることにあるため、より詳しく調査対象者に迫っていく必要がある。よって、先行研究の量的調査による結果を重要な資料として用いながら、対象を個人に焦点化してインタビュー調査を行い、対象者一人ひとりの語りから、その個人が生活しているフィールドの中での、個々の「主観年齢」形成について、多角的に検討していくアプローチをとった。

### 2.4 予備調査

2007年2月～3月に神戸市内のNPO法人のスタッフ及び利用客12名(平均年齢65.1歳)に対して、「主観年齢」を

中心とする簡略的なライフストーリー・インタビュー調査を行った。その結果、「主観年齢」形成の背景には、個人にとって印象的な出来事や経験があるという傾向が見出された。具体例としては、仕事や家事が忙しかった頃、外国人との交流を始めたこと、などである。そこから、それらの出来事が大きな印象として現在でも記憶されており、その記憶を中心として、自身の「主観年齢」を形成しているのではないか、という仮説を立てた。

### 2.5 インタビュー調査内容

性別、現在の年齢、現在の「主観年齢」以外に、予備調査の結果から以下に示す①～⑦の質問項目を設け、各項目について自由に語ってもらった。また、調査において、対象者がより意識していると筆者が感じた出来事・経験や、一般的に特別とされるライフイベントについての語りがある場合は、採り上げて詳しく語ってもらうようにした。なお、インタビューの内容は筆記により簡略的に記録した後、語られた通りに文書化を行った。

- ① 「主観年齢」の頃の生活について
  - ・社会的役割
  - ・身体状態
  - ・生活に対するポジティブ度
- ② 現在の「主観年齢」はいつから持っているか
- ③ ②の頃の生活について
  - ・社会的役割
  - ・身体状態
  - ・生活に対するポジティブ度
- ④ 現在の生活について
  - ・社会的役割
  - ・身体状態
  - ・生活に対するポジティブ度
- ⑤ 現在までの「主観年齢」の移行について
- ⑥ 今後の「主観年齢」の移行について(予測)
- ⑦ 「年をとること」についてどのように思うか
  - ・肯定的か否定的か
  - ・今後の抱負

①、③、④の項目にある「社会的役割」「身体状態」「生活に対するポジティブ度」とは、黒田(2005)や佐藤ら(1997)によって「主観年齢」規定における有意な要因とされた、「社会的役割」、「健康度」、「病気の有無」、「生活満足度」を参考としている。①では「主観年齢」の頃、③では「主観年齢」を持ち始めた頃、④では現在と、各時期の生活について調査することによって、個人がどのようにして「主観年齢」を形成するようになったのかを考察した。また、⑤では「主観年齢」の移行を調査し、それが①、③、④で尋ねた生活内容とどのように関係しているのかという観点からまとめた。⑥、⑦は、黒田(2005)によって「主観年齢」規定における有意な要因として「老いに対する柔軟性」が挙げられていることから、今後の「主観年齢」についての本人の予測と、今後の展望について整理した。

### 3. 結果と考察

#### 3.1 主観年齢遷移グラフの型別分類

「主観年齢」の遷移を一人ずつグラフ化し、そのグラフの型から「平行型」、「横ばい型」、「緩やか型」を分類基準として、それらの組み合わせによる計7種類の型に「主観年齢」の遷移を分類した。また、背景の内容は個人によって様々であるが、「結婚」や「就職」、「育児終了」などのライフイベントや、「趣味開始」、「交友関係の変化」など、「生活環境の変化」があって、それにより「主観年齢」が形成されることが多い、といえる。以下に、調査の一例を示す。

「平行型」Cさん (64歳、男性) : 「主観年齢」54歳

②現在の「主観年齢」はいつから持っているか

【60歳の時に退職した時から】

⑤現在までの「主観年齢」の移行について

【退職までは気にしてなかったし、プラスマイナスゼロだったと思います。退職してダンスを始めてからずっとマイナス10歳です。】

⑥今後の「主観年齢」の移行について (予測)

【これからもマイナス10歳です。】

以上から、Cさんは60歳の退職時に、暦年齢よりも「10歳」若い50歳という「主観年齢」を持つようになり、その後現在まで、暦年齢よりも「主観年齢」が「10歳」若いままであり、今後についても暦年齢よりも「主観年齢」が「10歳」若いままであるだろうとしている。その結果を遷移グラフとして図1に表示する。

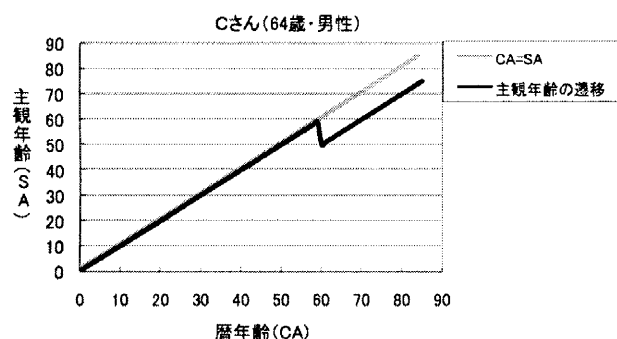


図1：主観年齢遷移グラフ（平行型）

#### 3.2 団塊世代の自己若年視

##### 3.2.1 自己若年視規定要因

「主観年齢」が暦年齢よりも高くなることを「自己高年視」、「主観年齢」が暦年齢よりも低くなることを「自己若年視」と言う。本研究の調査結果では、自己若年視が圧倒的に多く、自己高年視の現象があったのは全15例中1例のみであり、その1例においても、最終的には自己若年視した状態に変化している。自己若年視が起こった年代別に、自己若年視規定要因をまとめたものを表1に示す。

##### 3.2.2 自己若年視メカニズム

次に、自己若年視の規定要因が「主観年齢」形成にどの

表1：自己若年視の年代別規定要因

	自己若年視規定要因
20代	就職、転職、結婚
30代	再就職、最も忙しかった頃
40代	育児終了、再就職、交友関係の変化、周囲の評価、自己認識、趣味開始
50代	「50歳」になったこと、退職、育児終了、趣味開始、交友関係の変化、最も忙しかった頃
60代	退職、再就職

ように影響を及ぼしているのかを検討するため、Shum (1998) の「記憶マーカー (temporal landmarks in autobiographical memory processes)」理論を用いた。個人の出来事や経験が比較的深く記憶に刻まれた場合、それは「記憶マーカー」として作用し、「記憶マーカー」の数が少ないと「時間がスピードアップする」ように感じる。即ち、実際の一定な時間の流れに対して、自身の感じる時間の流れが遅れるということであり、暦年齢に対して「主観年齢」の進む速度が遅れるということである。この現象が「自己若年視」であり、これを「記憶マーカー」の自己若年視化作用とする。

Schlossberg (1989; 武田ら2000)、Schlossberg, et al. (1995) 及び Schlossberg & Robinson (1996) の「トランジション・モデル」の理論をここに引用すると、「トランジション」は「成長のための変化をもたらす素晴らしい機会を提供する“転機”であることから、個人の“生活環境の変化”が「トランジション」となって「記憶マーカー」として作用するとき、「記憶マーカー」の濃密さによって「主観年齢」の進む速度が変化するという図式が成り立つ。

次に、調査例について「主観年齢」を規定する「記憶マーカー」を明らかにし、「生活環境の変化」が「記憶マーカー」として作用し、その濃密さや性格によって様々に「主観年齢」を規定しているという流れを確認した。さらに、中年後期の経験が「記憶マーカー」として多く作用していることが見出された。この結果に、「中年後期特有の、社会的立場の変化などの“志向の転換”や、自由に使う時間が増えるなどの“余裕と成熟”が同時期に関連して経験されると、自己変容が肯定的に意味づけられる」という若本・武藤 (2006) による考察を合わせると、中年後期特有の「記憶マーカー」形成による自己若年視が肯定的に捉えられ、「若々しくいつまでも生き生きとした」団塊世代が誕生するようになるという、団塊世代の「自己若年視」メカニズムが導き出された。

以下に、調査の一例を用いて、具体的に自己若年視メカニズムについて説明する。

「緩やか→横ばい型」Stさん (58歳、女性) : 「主観年齢」48歳

Stさんは「40歳」の頃から「主観年齢」が暦年齢よりも

低くなり、「58歳」の現在、「主観年齢」は「48歳」で以後も「48歳」のままであろうと予測している。インタビュー調査の内容から、Stさんは「40歳」の時に趣味開始、交友関係の変化、再就職という「トランジション」を経験し、これが「記憶マーカー1」となって自己若年視に作用していると推察される。また、【子どもが大きくなってダンスを始めた頃から、若々しい気持ちで。周りが年上の方ばかりだから気持ちが若くなる】という語りから、Stさんにとって趣味開始による交友関係の変化は、「主観年齢」の規定に大きく影響する「大きな記憶マーカー」となっていると考えられる。

次に「48歳」で「主観年齢」が止まる点について考察する。まず、「58歳」の時に育児終了という「トランジション」を経験し、これが「記憶マーカー2」となって自己若年視に作用していることが挙げられる。また、「主観年齢」の「48歳」の頃に、「子ども独立」という「トランジション」を経験し、これが「記憶マーカー2'」として作用していること、さらに、「年上の人との交友関係」の継続により、「記憶マーカー2」以後も自己若年視する環境が継続したこと、という3つの要因から、比較的自己若年視の度合いの大きい「横ばい」型に移行したと考えられる。

また、上述のように「記憶マーカー」の数が少なくなると自己若年視が起こる、という考察を得た。この点に関して、Shum (1998) は「記憶マーカーは、生活に変化がある時に一層多くなるという因果関係の評価により、高齢者は20代の記憶が比較的容易であり、その時代のマーカーが非常に多く存在する結果、それが時間意識に影響する」と述べている。このように「記憶マーカー」となりうる出来事は、年齢に関わらず日常的に存在するが、高齢になるにつれ様々な経験が蓄積され、「記憶マーカー」として認知される出来事が厳選されていく、と考えられる。さらに、過去の「記憶マーカー」を振り返る時、年齢が低いと過去の時間が短く、詳細に色んなことを思い出すことができるが、高年齢になると、思い返す時間が長くなり、より深い記憶、即ち「より大きな記憶マーカー」ばかりを思い出すようになると考えられる。

このことから、調査した団塊世代においても、現在から過去を振り返って「より大きな記憶マーカー」が採り上げられ、その「記憶マーカー」以後は個人にとって「大きな

記憶マーカー」の数が比較的少なくなる。その結果、「記憶マーカー」が疎になり、「時間がスピードアップする」ように感じて、実際の暦年齢に対して、個々の持つ「主観年齢」の進む速度が追いつかず、「自己若年視」が起こると考えられる。

### 3.3 アクティブ・シニア

#### 3.3.1 アクティブ・シニアのメカニズム

「2007年問題」に先駆けて、退職後の団塊世代の暮らし方等について指南するメディアが急増している。それらの多くはアンチ・エイジングの視点から、「生涯現役」をモットーとしており、「アクティブ・シニア」もそのような世代を指すものとして、近年、頻繁に用いられるようになった言葉である。「アクティブ・シニア」の定義はまちまちではあるが、「定年イコール人生の定年とは考えず、年齢に関係なく、仕事や趣味に意欲的であり、社会に対してアクティブな行動を起こす新世代のシニア層」のことを指し、「生涯現役志向が強く、経験豊富で優れた価値判断を有するシニア」(株式会社日本総合研究所, 2004) と、本研究では捉える。世代としてはちょうど「団塊世代」に該当する。

では、「アクティブ・シニア」はどのような経緯から誕生したのか、以下に「主観年齢」の観点から説明する。中高年期は退職や子の独立などの環境変化を経験する時期であり、それらの環境変化が「トランジション」となり、「記憶マーカー」を生み出す。「記憶マーカー」が生み出されると、それ以降の時間の流れが速く感じられるようになり、それは即ち、相対的には自身の感じる時間の流れが遅れるということである。これは、年齢という観点でみると、暦年齢の速度に対して、「主観年齢」の速度が小さいと表現でき、暦年齢に対して「主観年齢」が追いつかない、「自己若年視」という現象を起こす。また、中高年期は老いの過程にあり、社会的立場の変化や嗜好の変化などの「志向の転換」と、経済的・時間的に余裕ができて自分の人生を楽しむようになる「余裕と成熟」を同時期に経験する特有の時期である。加齢に伴う自己変容というニュートラルな経験である「志向の転換」を、老いに伴う心理面、生活面のポジティブな経験である「余裕と成熟」の関連の中で経験される場合、そこでの自己変容は肯定的なものとして意味づけられる。

以上から、中高年期という時間的・経済的に余裕ができる時期に「トランジション」を経験し、その際の自己変容を肯定的に捉えて「自己若年視」するようになるため、「若々しくいつまでも生き生きとした中高年者」という「アクティブ・シニア」が誕生する、というメカニズムが成立する。

#### 3.3.2 「老い」過程における望ましい主観年齢モデル

「生涯現役」志向の「アクティブ・シニア」もしばらくすれば、健康面の衰えや機能の低下、親や配偶者、仲間の死といった高齢期特有の「トランジション」が避けられな

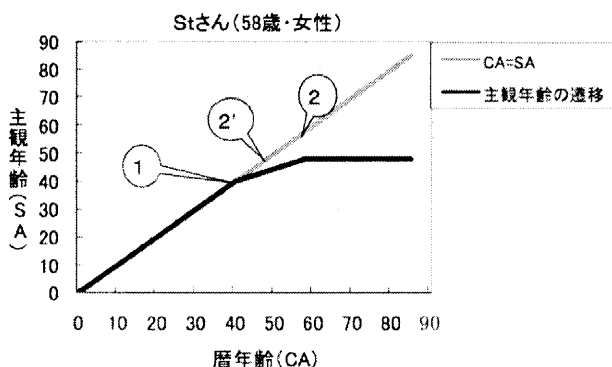


図2: 記憶マーカーと主観年齢遷移 (Stさん)

くなり、孫の誕生や、自分が最年長者になるなどの役割意識が強くなるような「トランジション」も起こりうる。そのような個人の「生活環境の変化」の「トランジション」が「記憶マーカー」として作用すると、「しばしば途にくれたり、心的外傷を受ける経験となる一方、成長のための変化をもたらす素晴らしい機会を提供」される。だが、上述の通り、加齢に伴って「記憶マーカー」は厳選されるであろうし、同じ経験をしてもそれが深い記憶となって「記憶マーカー」となるか否かは、個人によって様々である。

「トランジション」がより深い記憶となって「記憶マーカー」となる時、そこには「強い印象」が作用している。また、それは「転機」となるようなものであることが多い。例えば、「トランジション」が想定外のことや、今までの自己とかけ離れたものであれば、その経験は「強い印象」を残すであろうし、「転機」となりやすいと考えられる。自己若年視の度合いが大きく、「主観年齢」と暦年齢の間に大きな差がある人は、「若々しい」かなり自己若年視した主観的自己と、「老い」によるネガティブな「トランジション」の間に、大きなギャップを抱えることになる。

佐藤(1999)によると、加齢に伴ってある側面の機能が低下したとき、それを老いと捉えるか、脅威と感ずるかには個人差があり、その差は個人の主観的過程によって構成される。つまり、「老い」によるネガティブな「トランジション」が訪れた時に、それを発達過程の一部である「老い」として受容することもできるし、自己に大きなショックを与える「脅威」だとして拒否しようとすることもできることを意味する。前者の場合、その「トランジション」は自己の発達過程の一部として予期、あるいは認知していたものであるため、自己と「トランジション」の間にはそれほど大きなギャップはない。よって、その「トランジション」を乗り越えることは比較的容易であろう。一方、後者の場合、「老い」によるネガティブな「トランジション」を脅威刺激と捉え、自己と「トランジション」の間に大きなギャップができる。「トランジション」を乗り越えることを拒否しようとするが、不可避であるため、「トランジション」を乗り越えるのに相当の努力を要すると考えられる。

「トランジション」を経験している間、つまり、「トランジション」を「乗り越えている」間は、「記憶マーカー」が濃密に生み出され、「時間がスピードダウンする」ように感じ、自己高年視が起こる。「トランジション」の経験後は、「記憶マーカー」が比較的疎になって、再び自己若年視が起こるが、「トランジション」を経験している期間、「乗り越えている」期間が長いほど、高年視する期間が長くなり、「若々しい」気持ちで過ごせる時間が少なくなる。よって、予め準備をして肯定的に受容して臨めば、「乗り越える」期間が比較的短く済み、高年視する期間も短く、再び「若々しい」気持ちで残りの人生を過ごすことができる。しかし、予め準備することもなく、なかなか受容出来ずに「トランジション」に対して否定的であると、「乗り越える」期間が長くなり、従って、高年視の期間も長くなって、「若々

しい」気持ちで過ごせる時間が少なくなってしまう。

Palmore (1982) によれば、実際の「老い」よりも主観的に経験される「老い」の方が心理的・生物学的インパクトを持つ。つまり、不可避な「トランジション」であるのならば、否定的に捉えるよりも肯定的に捉えた方が、「トランジション」を「乗り越える」ことができるということを示唆している。

以上より、高齢期に訪れる「トランジション」をなるべく短い期間で「乗り越え」て、いつまでも「若々しく」生き生きと過ごすためには、「老い」の「トランジション」に向けて、予め受容する準備をしておくことが不可欠であるといえる。では、どのような準備をしておけばよいのだろうか。それは、「老い」の「トランジション」を、自己の発達過程の一部として予期し、認識しておくことである。そして、自己と「トランジション」の間のギャップを小さくするために、訪れる「トランジション」に向けて、「主観年齢」が暦年齢に近づくように、自己若年視の度合いを修正しておくことである。そうすれば、「トランジション」を比較的容易に乗り越えることができる。

これらの考察をふまえて、高齢期をできるだけ「若々しい」気持ちで過ごすための、望ましい主観年齢遷移モデルを以下に提示する。図3は簡略した全体像を示した。この図では、一生を終える時を現在として、過去を振り返って見た時の自己の「主観年齢」の遷移を描いている。「小さな記憶マーカー」は思い返されずに略さってしまうので、グラフには表れない。図4は、図3の60代以降の期間を拡大したものである。60歳頃に退職や子の独立などの「トランジション」が「記憶マーカー」として作用しており、そ

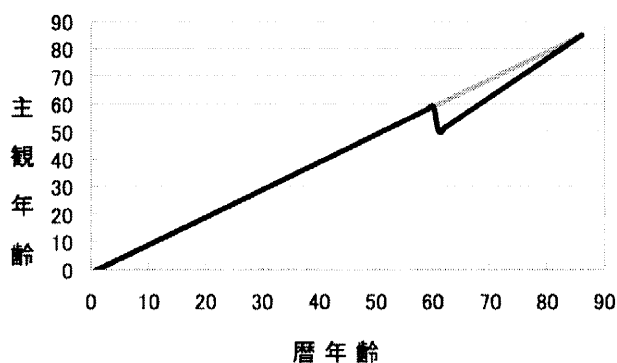


図3：望ましい主観年齢遷移グラフ（全体）

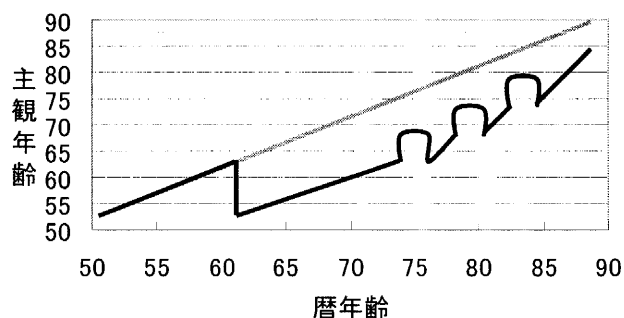


図4：望ましい主観年齢遷移グラフ（60代以降）

の後、“老い”の「トランジション」が数回訪れている。その度に、できるだけ短い期間で「トランジション」を乗り越えて、高年視と若年視を繰り返す様子を表したものである。

いつまでも若々しくいようとする団塊世代とは対照的に、社会に対して閉鎖的な若い世代が増加しているといわれる。年齢的にも若く、体力も備えているはずの彼らには、団塊世代に見られるような“生きる”エネルギーが不足しているように感じられる。

確かに、団塊世代の人々は高度成長期に青年期を過ごし、科学や経済などあらゆる発達とともに年を重ねてきたため、“生きる”エネルギーをその文化の中で自然に備えてきたのかもしれない。しかし、現代はあらゆる分野の発達も飽和点に達しているといわれ、若い世代が“生きる”エネルギーを自然と備え持てるような環境ではない。“生きる”エネルギーが不足した若い世代は、今後どのような中高年者になり、どのような主観年齢を持つ高齢者となっていくのであろうか。

今後の課題として、今回取り上げることができなかった非社会的な高齢者の人々の生活調査を行い、彼らの主観年齢と今回得られたアクティブシニアの主観年齢の持ち方とを比較考察したいと考えている。そうすることによって、社会に閉鎖的な人々の主観年齢の問題をより一層明らかにすることができるかと期待される。

#### 付記

本論文は、高岡要子が平成19年度に神戸大学大学院総合人間科学研究科に提出した修士論文「団塊世代の主観年齢規定要因に関する一考察」の一部を指導教員の城仁士が編集・推敲し、論文投稿したものである。また、論文印刷にあたり、平成20年度科学研究費補助金（基盤（B）：課題番号20300235）の助成を受けた。

#### 引用文献

- Barak, B. & Stern, B. 1986 Subjective age and correlates: A research note. *The Gerontologist*, 26, 571-578.
- Cutler, N. E. 1982 Subjective age identification. In D. J. Mangen, & W. A. Peterson (Eds.) *Research instruments in social gerontology: Vol. 1 Clinical and social psychology* (pp.437-461). Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Hendrics, J. 1987 Age identification. In G. I. Maddox (Ed.) *The encyclopedia of aging* (p.15). New York:Springer.
- 株式会社日本総合研究所 2004 アクティブシニアアカデミー公開講座.
- 黒田文 2005 中高年者の主観年齢に関する規定要因の考察—エイジレス人間との比較において— *老年社会科学*, 27 (3) 295-302.
- Montepare, J. M., & Lachman, M. E. 1989 “You’re only as old as you feel”: Self-perceptions of age, fears of aging, and life satisfaction from adolescence to old age. *Psychology and Aging*, 4, 73-78.
- 落合恵美子 1997 二世世紀家族へ 有斐閣.
- Palmore, E. B. 1982 Predictors of the longevity difference: A 25-year follow up. *The Gerontologist*, 22, 513-518.
- 佐藤眞一・下仲順子・中里克治・河合千恵子 1997 年齢アイデンティティのコホート差、性差、およびその規定要因：生涯発達の視点から *発達心理学研究*第8巻第2号 88-97.
- 佐藤眞一 1999 高齢期の知覚・認知機能 東清和（編）、シリーズ高齢社会とエイジング:6 エイジングの心理学 1-30, 東京:早稲田大学出版部.
- Schlossberg, N. K., Waters, E. B., & Goodman, J. 1995 *Counseling adults in transition: Linking practice with theory* (2nd ed.), New York: Springer.
- Schlossberg, N. K., Robinson, P. S. 1996 *Going to plan B* N. Y.: Fireside.
- Schlossberg, N. K. 1989 *Overwhelmed: Coping with life’s ups and downs* Lexington Books (武田圭太・立野了嗣監訳 2000 「選職社会」転機を活かせ 日本マンパワー出版).
- Shum, M. S. 1998 The role of temporal landmarks in autobiographical memory processes. *Psychological Bulletin*, 124, 423-442.
- 鳥羽美香 2005 エイジズムと社会福祉実践—専門職の高齢者観と実践への影響— *文京学院大学研究紀要*Vol. 7 No. 1 89 - 100.
- 若本純子・無藤隆 2006 中高年期における主観的老いの経験 *発達心理学研究*第17巻第1号 84-93.

(受稿：2008年5月8日 受理：2008年5月20日)